



集

書院は明治五年（一八七二）九月に開館した日本最初の近代公共図書館である。明治八年（一八七五）に出版された『開化節用集』の口絵に、鉄製欄干も新たな四条大橋と向き合う形で、集書院が描かれている。その賛は漢学者菊池三溪（純、一八一九〜一八九二）の七絶である。

満院の芸香細帙（うんこうしようち）鮮やかにして、等身の古典、新編に雑じる、這の中、別して育英の物有り、細読数行の単語篇。（原漢文）

書香漂う院内は、浅黄色の帙に入った和漢籍が縦型書籍に詰められ、院内に所狭しと並ぶ。ほとんどが新刊書だ。「等身の古典」が雑じる。結句に「単語篇」が開化期の「育英」の象徴として詠まれている。「単語篇」とは、慶応二年（一八六〇）に幕府開成所が発行した『英吉利単語篇』をいう。明治初年の英語教材需要にこたえて、全国各地で再版された。地方版はほとんどが木版であった。

京都では銅版の単語篇が発行された。古くは広川獅著『蘭療彙解』（一八〇六）の銅版挿図にさかのぼるが、嘉永年間から初代松本玄々堂などの活躍により、銅版印刷文化が広く根付いていた。銅版師たちが作品に彫り込んだオランダ語式ローマ字銘、まだ見ぬ気球や機関車の図には、職人社会の異国趣味とともに、革新の気風が感じられる。全国に先駆けて整備された番組小学校の教科書にも銅版が用いられた。旧来の手習い書にならった折帖に、微塵銅版画の技術を応用して、児童必須の基礎知識が盛り込まれている。

節用集は江戸時代から明治二〇年代まで、日常生活で広く用いられた木版の以呂波引き分類語彙辞典である。頭注欄（頭書かしらがきという）で百科事項を解説し、本文は以呂波順に同音で始まる語彙を、乾坤時候など伝統的な部立てによって、分類列挙する。各語彙は草書体を行の中央に置き、楷書体、漢字の音訓を左右に配して、日常使用する草書体から楷書体の検索を併にしている。幕末開国以降、前付けに世界地図を掲げ、頭注に海外事情や洋学知識を盛り込むようになった。『開化節用集』は草書体と部立てを廃した、新時代の「引き楷書体漢語辞典」である。

幕末から明治三〇年代まで、京都で洋学書の出版販売で重きをなした書店を春和堂という。初代若山屋茂助（一八〇一頃〜一八六三頃）は「婦嬰新

説」（英医合信、再版一八四九）、「西医脈鑑」（広瀬元恭訳、一八五七）、「築城新法」（広瀬元恭訳、一八五九）に続いて、オランダ語用法辞典『洋学須知』（一八五九）を出版した。二代茂助（茂介、一八四八〜一九二〇）は明治初年に店名を春和堂に改め、『和英通語』（松岡章編、一八七二）のあと、『養生訓蒙』（神戸文裁編、一八七八）、「習乙邊氏常用方鑑」（一八七九）、「脚氣病論」（シヨイベ原著、一八八四）など療病院関係の多くの医学書を手がけた。

特筆すべきは生理学教科書『嗜氏生理記聞』（一八七四）である。見返し扉に「京都書林合書堂蔵」となっているが、序文を寄せた「春和生」すなわち二代茂助が主導した出版物である。茂助の序文は洋学新知識の普及にかける気概に溢れている。文中の「煉真社中」は早く慶応二年に明石博高が始めた化学研究会、煉真舎をさす。左に片仮名を平仮名に改め、句読点、振り仮名を付して全文を引用する。「日本紀元二千五百三十三年」は明治六年（一八七三）にあたる。

此書と蘭の名医嗜度映氏、本邦に招じて医学教師とするの日、生理学教育の為め講述せるを記載するものにして、従学徒弟の筆頭に成れるものなり。人をして文明化育の域に奨ましむるや、各々身体の造構と健康の官能を究識せんことを要す。苟も我れ人、天地の間に生活し万物の主宰として靈妙不測の智慧を稟賦する所以、詳に之れを弁明せずんば、何ぞ今日の事務を勉め実理を推し身体を愛護し天寿を寧ずべけん。之れ生理学の世に緊要なる所以にして、各人須知せずんばあらざるの学なり。況んや疾医の道に於てをや。此書、義理通暢、条路井然。初学晨に了解し易きの書なり。然れども伝写の謬誤あるを以て、世に之れを憂ふること少しとせず。茲に都下煉真社中、本書を訂し、洋語の直訳のみは翻して義解し或は対訳し、欠漏は補充し、或は文意錯雑なるは刪整し、全成せり。頃日之れを鑄行せんことを庶幾ひ、全稿を社中に乞ひ、更に之れを生理記聞と表し、世に刻公す。永く生理学の規範と為べき典籍と云べきなり。

日本紀元二千五百三十三年一月

春和生 識

知を広める

洋学を伝えた京都の出版文化

松田清

